

装飾古墳の世界

紀元5～6世紀ごろ、北部九州をはじめ日本の各地で墓室の中に色鮮やかな彩色や線刻で壁画を描いたり、石棺などに浮き彫りをほどこした装飾古墳が造営されていたことは古くから知られている。また、昭和47年（1972）奈良県高松塚古墳から中国の壁画墓の影響を強く受けたと思われる華麗な壁画が発見されるや、国民の関心は一段と高まってきましたが、考古学・美術史学などからの研究はあまり進んでおらず、国民の関心に応えているとは言えないのが実情である。

本展では、考古学、歴史学、美術史学、宗教学、思想史、神話学などさまざまな角度から光をあてて研究した最近の成果と、装飾古墳以前の縄文・弥生時代の絵画資料や、おなじ古墳時代の造形美術である埴輪といった実の原点ともいえる原始芸術をもあわせ、仏教美術受容以前の日本美術、ひいては今日の日本文化の基層を成す古代文化を紹介した。

会期／平成6年6月4日（土）～7月17日（日）

会場／特別展示室1、南蛮美術館室、特別展示室2、ギャラリー、ホール

主催／神戸市立博物館、朝日新聞社

後援／文化庁、朝日放送

特別協力／国立歴史民俗博物館

開催日数／38日

入館者数／20,679人（544人／日）

出品件数／150点



※この図録は完売いたしました。